vol.02
2022.12.12

家庭科教育研究所 ニュース

Home Economics Education Research Lab.

目次

お知らせ …… p.2
ひろば …… p.3 - 4
会員からのひとこと …… p.5
編集後記 …… p.5 - 6

家庭科教育研究所ニュース Vol.2 をお届けします。この間、入会して下さる方も徐々に増え、会員数は 120 名ほどになりました。多くの方に活動に加わっていただきありがとうございます。

先月、11 月 19 日には研究所設立記念シンポジウムを開催することができました。ご参加いただいたみなさまありがとうございました。また、当日参加できなかった会員のみなさまにはアーカイブ配信をいたしました。視聴して下さった方も多いと思います。ありがとうございました。本誌「ひろば」でその様子をふり返ります。

「お知らせ」には、研究所主催の第 2 回勉強会の予告を掲載しました。今回は、「男女共同参画の視点を取り入れた家庭科の指導」というテーマでの企画です。ディスカッションにも多くの方の参加をお待ちしています。詳細については 2 ページ をご覧ください。

そして「会員からのひとこと」は、東京都公立小学校家庭科研究会会長の飯島典子先生にご寄稿いただきました。先生が家庭科にかかわるようになったきっかけ、先生の家庭科観をお話ししていただきました。

今年もいよいよ押し詰まってのお届けとなりましたが、来年がみなさまにとって良い年でありますようにお祈りいたします。

研究所では、みなさまの意見・情報をお待ちしています。事務局宛 kateika@wayo.ac.jp にお寄せください。また、入会は随時受付けています。家庭科教育研究所 HP「入会のご案内」からお手続きください。https://www.wayo.ac.jp/visitors_company/family_section

お知らせ

家庭科教育研究所 勉強会のお知らせ

今回は、千葉県木更津市立岩根中学校で家庭科を教えておられる淡路先生に、家族・家庭生活領域の授業実践の紹介をしていただけることになりました。
その後、授業の考案からまとめの段階まで指導者とした関わった久保先生に、授業実践の読み解きをしていただきます。
報告の後、参加者全員での意見交換を行います。
年末のひととき、お目にかかれますのを楽しみにしています。

家庭科教育研究所第 2 回勉強会

◆ 日時 ： 2022 年 12 月 27 日（火）16:00～17:30

◆ 場所 ： オンライン

◆ 予定 ：

1. 授業紹介
   報告者 淡路 倫子（あわじ ともこ）
   千葉県木更津市立岩根中学校教員（会員）
   報告タイトル
   「男女共同参画の視点を取り入れた家庭科の指導
   ―家庭科の家族・家庭生活領域の授業実践―」

2. 読み解き―授業実践の注目点―
   久保 桂子 和洋女子大学特任教授・家庭科教育研究所研究員

3. 意見交換

会員のみなさまには、開催日の数日前に zoom 情報をお知らせします。
参加ご希望の方は、そこに示した URL からお入りください。
後日、アーカイブ配信をします。
当日の参加が難しく、ご興味のある方はそちらを視聴してください。

ひろば

家庭科教育研究所設立記念シンポジウムからほぼ１ヵ月が経とうとしています。あの日、家庭科へのたくさんのメッセージを受け取りながら「これらを家庭科教育の中にいれていくにはどうしたらいいか」ということを考え続けていました。参加された方々からの質問にも同様の問いがありました。答えは、私たち家庭科に携わる一人ひとりが見出すべきかもしれませんが、そこに至る鍵は当日のお話しの中にもあったように思います。いくつかの印象的な言葉を思い出しながら、参加した1人として、個人的な感想を述べます。

「人・社会・地球環境に配慮した行動をすることは義務ではなく、だれもが持っている権利です。」

これは、「持続可能でエシカルな社会を創るために、私たちにできること」というテーマで話してくださった、一般社団法人エシカル協会代表理事、日本ユネスコ国内委員会広報大使の末吉里花氏の言葉です。エシカルというのは人・社会・環境に配慮した考え方や行動を表す概念で、そういうエシカルな暮らしが幸せのものさしとなるような社会の実現を目指して行動し続けよう！という呼びかけの中で使われました。

その講演の中で、興味深いデータが紹介されました。2015 年に科学技術振興機構（JST）の主催で開催された世界市民会議「気候変動とエネルギー」の報告書に納められた調査結果です。この世界市民会議というのは、世界 76 ヵ国と地域、合計 96、市民総数 9278 人にのぼる人たちが参加して、同じテーマについて議論し、その結果を報告し合うというもので、日本でも年齢、職業、居住地域、学歴等多様な「市民」100 人が 15 個のグループに分かれて議論した結果が収められています。国際比較調査の手法としてみてもとてもおもしろいと思いました。

末吉氏が紹介されたのは、先進諸国を含め世界市民の多くは気候変動対策により「生活の質が良くなる」（66%）と認識しているが、日本市民の多くは「生活の質が脅かされる」（60%）と認識しているというデータでした。すでに世界の転換点の向こう側に立って、持続可能なより良き未来を考えている人たちに対して、まだこちら側に留まって、これまで享受してきた便利さや快適さを手放したくない気持ちでこれからやってくる転換後の世界をみつめている日本人というような、立ち位置の違いからくるものかもしれません。

このデータをみて、家庭科教育の貢献はここだな、と思いました。家庭科のエシカルは、環境保全のために～しなければならない、持続可能な社会を構築するために～すべきである、というような、だれかのためにしなければならない義務について考えるのではなく、子どもたちが環境と向き合い、相互作用しながら環境との調和的なライフスタイルを身につけていく基盤をつくるものです。この社会を生きる当事者として、持続可能な社会のビジョンを描き、そこに向かって話し合い、アイディアを出し合って、協働しながら、新しい生活の価値ややり方を創っていけるみんなの権利について考え、そこに向かって賑やかに行動する子どもたちを家庭科は育てているんだ、と思いました。
家庭科のもっている方法論や環境に向き合う姿勢を、もっと意識して広げていこう！と思えた瞬間でした。

「これが子どもが一番初めに出会う調理だとしたら、ごく自然に、調理ってこういうものだなと思うはず」

東京ガス都市生活研究所所長の三神彩子氏は、「よりよい暮らしを求めて」というテーマのもとで、省エネをキーワードに、健康で心豊かな生活の創造へと向かう行動変容と、それをもたらす教育的働きかけについて、様々なデータを用いて実証的に示されました。

その 1 つとしてエコ・クッキングの紹介がありました。調理とは「食べること」に関する一連の意思決定・知識・スキル・行動の総体ですが、そこに「環境のことを考える」という要素を加えることによって生じる変化を具体的に示してくれました。「捨てない」ことで可食部が 15% 増やせる、「エネルギーを無駄使いしない」ことで二酸化炭素が 5 割削減できるという数値をあげながら、「これが子どもが一番初めに出会う調理だとしたら、ごく自然に、調理ってこういうものだなと思うはず」との言葉に、家庭科の調理の意義を再認識しました。

原理・原則の科学的追求、実際の生活の場で実践できる技術・技能の体得、何をどう選んでどう処理するかまでの一連の意思決定…等々、すでに多くのものを子どもたちに考えさせ、伝える調理の学習ですが、さらに日常生活の行為や生活習慣の形成にも大きく関与するものなのだという再発見でした。このことは、調理だけではなく他の実習・体験的な学習にも共通することだと思います。

家庭科の先生方には当たり前すぎて再発見といういい方には当たらないかもしれませんが、先生の目的をもった働きかけによって、Society5.0、DX の時代を生きていく子どもたちが、そこをたくましく生き抜くための新しい生活習慣・行動を知らず知らずのうちに身につけていく、よりよい生活を創造する家庭科での実習や体験は、このように子どもたちの生活に新しい価値を与え続けるんだ、と認識できたことは、やはり再発見、大きな収穫でした。

そして、3 つ目の言葉は、一般社団法人コミュニティ・ネットワーク協会会長袖井孝子先生のこの言葉です。「こういう社会にしたのは誰だ？と問う。この頃の若者って偉い。私たちが若いころは環境のことなんて考えていなかった。今の子どもたちは良く考え、行動を起こしている。高齢者も若者に学ぶべき。世代間の学び合いを促進していくことも家庭科の重要な役割です」。

「人生 100 年時代の持続可能なコミュニティ」というテーマのもと、人生 70 年時代から人生 100 年時代への転換、ライフコースの見直し、生活基盤、コミュニティをつくることについて話してくださった先生が、最後に加えた一言です。COP27 での若者の行動にも触れながら、若い世代の考え方や行動を尊重しつつ共に共生社会を創っていこうというメッセージでした。知らず知らず、教える人と教えられる人というような一方向になりがちな世代間の関係性を、双方向の協働する関係性へと転換すること、人生 100 年時代の主人公はすべての世代の人たちであることに、改めて気づかせられました。次世代も含む人生の時間軸、個人、家族、コミュニティ、社会へと広がる空間軸をもった家庭科は、まさにこれからの人生 100 年時代のウェルビーングに関わって重要な役割を持っていることを肝に銘じました。

このシンポジウムでは、当初「家庭科への期待」を述べていただくという企画でしたが、「誰かに期待する」という一方向的な考えでなく、「みんなでできることをできるところからやっていこう」と、いつのまにか人と人、人とまわりのこと・ものとの関係が変化していきました。参加していく、変えることができる、繋がっていく、共生する、そんな言葉が響いて聞こえるような会場でした。

会員からのひとこと

私にとっての家庭科

東京都公立小学校家庭科研究会　会長
大田区立赤松小学校　校長　飯島　典子

家庭科教育に携わって、今年度で４０年を迎えました。私の父は小学校教員、母は家庭で洋裁をしていました。母の手作りの洋服を着て学校に行き、夕食にはおいしい手作りのおかずが並び、家族で食卓を囲むという昭和の時代を絵に描いたような家庭で育ちました。
子どものころから父の姿を見て教員になりたいという夢をもっていましたので、迷うことなくその道に進みました。家庭科の教員となったのは、進学した学校が技芸学校として始まり家庭科教育に力を入れていたことと、洋裁をする母の影響を受け、手作りのよさを自然と学んでいたことから、私の生きる道は、家政学だと確信し、現在に至っています。

夢が叶い家庭科の教員としての２８年間、授業づくりを楽しみ、研究を重ねてまいりました。いつも子どもたちに伝えていたことは、「家庭科の学習は一生役に立つ」ということです。様々な家庭環境で育った子どもたちですが、一人一人が自分の生活を見つめ、家族を大切にし、よりよい生活になるためにできることは何かを考えさせていました。

家庭科を専門としてきたことは、現在、管理職として学校経営をしていくうえでも大いに役に立っています。子どもたちの背景には家庭があり、その家庭を理解するには、家庭科で大切にしていることが関連しているからです。私自身これからも自分の生活を見つめ、すべての人の幸せを願って、よりよい生活を目指してまいります。そのためにも家庭科の研究を続けていきたいと思っております。

編集後記

このニュースの編集をしている折に、
ちょうど「ひろば」の原稿を書いている時でした。国際家政学会（IFHE）から、世界家政学の日（World Home Economics Day）2023 の活動予定を知らせるメールが届きました。世界家政学の日（WHED）というのは、家政学のより一層の推進を目的に、IFHE が 1982 年から毎年３月２１日を WHED と定め、各年のテーマのもとで、家政学はこういう専門です、家政学によって人々の暮らしはこう変わります、というキャンペーンを行うものです。今年は、アジア地区家政学会（ARAHE）でも、初めての WHED 2022 を開催しました。

WHED 2023 年のテーマは Waste Literacy というものです。
Waste Literacy「資源の無駄使いをなくすためのリテラシー」と訳せるでしょうか、勉強会の仲間と日本語訳をめぐって楽しい議論をしましたが、尊敬する大先輩は「賢く捨てるリテラシー」と格好良い日本語訳をつけてくれました。いろいろなイメージが湧いてくる言葉です。

IFHE はこのように趣旨を述べています。Waste Literacy は、Waste に関する人々の考え方や行動を変え、責任ある資源のマネジメントに関する新しい習慣を創り出すことを意味します。
家政学は持続可能な未来の創造に欠くことができない知識を提供し、私たちの毎日の生活行動を変革する上で重要な役割を担っています。なぜなら、持続可能な社会の構築は Home から始まるものだから。

大量生産・大量消費・大量廃棄からまだ抜け出せないでいる日本社会において、社会の基本的システムから人々の生活習慣にいたるまで、「何を捨てることが必要で、何を捨ててはいけないのか」その取捨選択の価値観・理念を生活者のリテラシーとして啓発し、実践する姿を示していくことは日本の家庭科教育（家政教育）にとっても重要な課題だと思います。そして、このことは今回の設立記念シンポジウムを通して共通認識されたことでもありました。いろいろなところで起こっている動きが繋がって、重なっていきます。

そして、WHED の過去のテーマをみていくと、興味深いことに気づきました。2015 年から 2018 年までの 4 年間は、「家政学のリテラシー」というテーマで活動が展開していたことです。

2015: "Home Economics Literacy: Skills for Families and Consumers - Food Literacy and Environmental Literacy"
2016: "Home Economics Literacy: Skills for Families and Consumers"
2017: "Home Economics Literacy : Empowering for Healthy and Sustainable Lifestyles"
2018: "Home Economics Literacy: Skills for Healthy and Sustainable Cooking"

「家政学」の重要な部分を家庭科教育（家政教育）が占めています。「家庭科教育」という括りの中で提供されている様々な知識・スキルを、たとえば、このように「〇〇リテラシー」というのを意識しながら統合化・総合化していくことも、興味深い課題だと思いました。今後、こんなこともみなさんと一緒に考えてみたいな、と思います。

どうぞよいお年をお迎えください。

Be Merry and Bright

また次号でお会いできるのを楽しみにしています。

（編集　工藤由貴子）